

「やります！ 24時間テレビ」 「本当の主役はあなたです」
2010年、国際芸術センター青森(ACAC)の指名型アーティスト・イン・レジデンスで、3人組若手アーティスト「ナデガタインスタントパーティー」がこう呼び掛けた。当時普及し始めていた動画配信サービス「ユーストリム」を使って、24時間テレビを

④ 青森市から公立大に移管

教育、地域への意識強く

ドキュメント展ではスタジオセットをそのままにした展示室に記録映像を映すモニターが並んだ。キュレーターの鷺田めぐるさん(現、十和田市現代美術館館長)は19年、雑誌「月刊アートコレクターズ」の企画「私が選ぶ平成のこの一点」で、このプロジェクトを紹介。「テレビからネット

作家の制作を手伝ったり、市民向けの芸術講座やワークショップなどに取り組んできたが、教育機関の一部となったことで、学生や市民に開かれた施設になる(ことをより意識していく)ことになった。

11年に初代館長の浜田剛爾さんが退任。12年に公募で選ばれた青森市のトの殿堂から、日常空間的な性格も持つようにすることにはアートセンターの1つの使命でもあった。学生や市民が積極的に関わられる素地を作ったほつが面白いと思ったと語る。

12年には、身の回りの素材で絵を描く浅井裕介さんの個展を開催。高さ約6m、全長約70mの展

示室の隣いっばいに、市民や学生とともに描いた巨大な泥絵は話題を呼び、約4700人が来場した。服部さんは制作の中で、作家と市民が刺激を受け合う姿を目にしたという。「制作に参加した妊婦さんとの交流から、浅井さんは女性の顔を持つ山を描き始めた。

放送するプロジェクトを行った。
集まったのは、子どもから70代まで100人以上の市民ボランティア。作家とともに自発的にアイデアを出して番組の企画、出演から裏方までをこなし、会場は熱気に包まれた。その過程で起きた出来事が作品となり、

への移行を象徴する、参加型アートの一つの頂点」と評価した。
このような市民参加型の企画を打ち出した背景には、ACACが09年、隣接する青森公立大学の公立大学法人化に伴い、青森市から同大に移管されたことがあった。それまでも市民サポーターが

美術家野坂徹夫さんが新館長に就任し、15年まで務めた。
09年から16年まで学芸員を務めた服部浩之さん(現・東京芸術大学大学院准教授)は「それまでのACACはいわゆる『美術』としての評価が大きかった。時代の要請もあり、敷居の高いア



100人以上の市民ボランティアが集まり盛り上がったナデガタインスタントパーティーのプロジェクト「24 OUR TELEVISION」2010年

構成し、地域への新しい視点をもたらした「青森市所蔵作品展」(13年)など、多彩な企画を通して幅広い世代にアプローチを続けてきた。一方で、悲しい事故も起きた。14年、個展開催中だった作家の國府理さ中だったが、展示室で自動車を走らせた。展示室で自動車を走らせた作家は調整中に急死した。事故は安全対策を強化し、安全対策として滞在制作する作家に展示方法の詳細と安全性を記した報告書提出を義務づけ、安全性が損なわれる恐れがある場合は修正命令ができるようになった。

現在も、作家が展示室で作業を行う場合はスタッフが常駐するほか、作家と相互に安全確認をして大学に報告書を提出。理事長以下の管理職が展覧会前に展示室内を確認して報告書を承認している。作家、来館者、スタッフを含めた安全対策の徹底は、スタッフが入れ替わった今も事故の教訓として受け継がれている。(大友麻紗子)